

私の戦争体験

M.K. 1981年千葉県生まれ♀

「キレル17歳」と未成年のうちからバッシングされ、気味悪がられた世代の人間。
ホリエモンブームに沸いた大学時代から、ITベンチャーで修行を積みつつ「さて、この先どうやって生きてくか」なんて真剣に考えた結果、働き方と生き方を変えるためにこの研究科に入学。
立花ゼミでは、自分の父親母親世代の方とも机を並べ、毎回冷や汗をかきながら8期ゼミ長を担当(名ばかりですが…)

私は、1981年生まれの28歳。立花ゼミ生の中でも、最も戦争から遠い世代の人間です。私と太平洋戦争の接点は、祖父祖母のみ。その祖父祖母も離れて暮らしていた為、親類から戦争について聞いたことはありませんでした。記憶にあるのは、満州に出兵した祖父の、背中に残されていた銃弾が掠めた傷跡だけです。

そんな戦争に疎い私が初めて戦争を身近なものとして感じたのは、靖国神社でアルバイトをした時。大学3年生20歳の頃でした。もともと好奇心の塊のような人間なので、「靖国神社でバイトなんて、何かすごいモノが見られるかも？すごいことに遭遇できるかも？」なんて軽い気持ちで応募したのですが、期待以上の体験をすることとなりました。

バイト内容は、靖国神社で行われる祭事の準備片付けや、来館されたご遺族のサポートといった珍しくは無い仕事。ただ、一般の方には公開されていない部屋に入ることができたり、普段は見えない裏側が覗けたので、ちょっとした探検気分で広い館内を歩き回っていました。

今となってはどの建物かは思い出せないのですが、大きな建物の中の、教室ひとつ分くらいある畳部屋の襖を勢い良くガツと開けたとき、日本人形が入ったガラスケースが何十個も(たぶん40個位?)並べてある光景がいきなり目に飛び込んできました。想像もしていなかったし、見たことが無い人形が何十体も揃って目の前に現れたので、圧倒されてしばらく理解できずに立ちすくんでいたのですが、ひとつひとつの人形ケースを見ているうちに、その日本人形が「誰のためのなのか」「何を目的としたものなのか」すぐ解ってしまって、血の気が引いて、息が止まったのを今でもよく覚えています。



その人形は、白無垢姿か朱色の花嫁和装姿で、人形ひとつひとつに古風な女性の名前がつけられていて、若い日本兵の写真や、戦地からの手紙やお守りや服などの遺品とともに一体づつガラスケースに入れられて…未婚のまま戦死した方に、ご遺族が贈った花嫁さんだったので

す。
「花嫁人形」と呼ばれるその何十体もの日本人形は、結婚することなく戦死した若者に戦後、「母から息子へ」「祖父母から孫へ」「兄弟から兄弟へ」贈られたもので、全国的に行われたものだったようです。その中で、私が目にした何十体もの花嫁人形は、全国のご遺族から靖国神社に奉納されたものでした。

振り返ると、それまで私が触れてきた学校や本、映画で知った太平洋戦争は、説明書きや解説がセットになっていて「こう受け取りなさい」的な上からのインプットとして「大人が伝えたいものを伝えられてきた」感が強く、違和感があったことは事実です。

それとは正反対で、私が見てしまった花嫁人形たちは、部外者の私をむしろ邪魔者として扱い、私が立ちすくんでいる真正面をずっと見つめ続けていて、「私は試されているんじゃないか」という感覚に襲われました。

花嫁人形と一緒に納められていた戦死者の写真は、私と同じくらいの年か、もっと若い男の子。その子たちが、戦地から家族に送った手紙や遺品が、一人ひとりの戦死者をリアリティのある存在として引き立て、戦争と死という恐怖が、すんなりと私の中に入ってきました。素直に怖いものとして戦争を受け止められた瞬間だったと思います。

後日、靖国神社内の遊就館という博物館に行った際、展示されていた花嫁人形に再会したのですが、その花嫁人形のガラスケースには、日本人形のみが入っている状態で、手紙や遺品など戦死者を特定できるものは収められていませんでした。恐らく、博物館に展示するに当たり、そういったものを除いた状態で展示したのでしょうか、一人ひとりの戦死者を想像する手がかりが薄れたことで、訴える力というか説得力が薄れてしまっているような印象を受けました。

その経験をもとに、立教立花ゼミで現在制作中のWEB MUSEUMでは、戦争体験者の一人ひとりの証をできるだけ残せるよう、そして、できるだけ加工せず、そのままの形で伝えてゆきたいな、と考えながら取り組んでいます。